

アートピア

社団法人 北海道美術館協力会

札幌市中央区北2条西17丁目 TEL・FAX 011-644-4025

北海道新聞

(1988. 9. 20 朝刊)



道に寄贈されたローランサンの「三人の娘」(右)と「犬と三人の乙女」

道に寄贈されたローランサンの「三人の娘」(右)と「犬と三人の乙女」の作品二点を十九日、道に寄贈した。贈られた絵は油彩の「三人の娘」(一九四三年作、十二号)と水彩の「犬と三人の乙女」(一九四〇年ごろの作、五号)。いずれもエコール・ド・パリ(パリ派)の華といわれるローランサンの円熟期の秀作で、淡い色彩のものの悲しい画風が特徴だ。

同会は、道民の名画の財産を増やそうと、昨年三月に募金運動を開始。約一年半で三十万人

近い個人と約四百の企業、法人から九千七百七十二万六千円が集まった。購入価格は油彩が七千五百万円、水彩画九百万円。贈呈式は道庁で行われ、作品を前に同会の武井会長が山中副知事に目録を伝達。同副知事が「たくさんの道民に見てもらえるようにしたい」と、お礼を述べた。寄贈作品は道立近代美術館所蔵のエコール・ド・パリの作品とともに、十月から札幌、旭川、函館で無料公開される。

北海道に名画を贈る道民の会(武井正直会長)が、募金運動で購入したフランスの女性画家、マリー・ローランサン(一八八三―一九

五六年)の作品二点を十九日、道に寄贈した。贈られた絵は油彩の「三人の娘」(一九四三年作、十二号)と水彩の「犬と三人の乙女」

道にローランサンの絵 名画贈る会が寄贈 「三人の娘」「犬と三人の乙女」

上記は北海道に名画を送る道民の会(武井正直会長)が、募金運動で購入したフランスの画家マリー・ローランサン(1883年~1956年)の作品2点を道に寄贈したときに北海道新聞に掲載されたものを再現したものである。

当時、北海道美術館協力会は、道民の持つ名画を増

やそうと、約一年半かけて、テレホンカードの販売、街頭募金、チャリティ活動等さまざまな方法で募金活動を展開し、結果、30万人近い個人と約400の企業、法人の協力を得た。約9,200万円の募金を集め、購入した絵画2点を北海道に寄贈、現在北海道立近代美術館に収蔵されており多くの美術愛好者に鑑賞されている。



法人設立25周年を迎えて

— 四半世紀・新たな出発 —

北海道美術館協力会会長 武井 正直

新年明けましておめでとう
ございます。

会員の皆様方には、それぞれの想いを込めて新しい年を迎えられたこと存じます。

さて、当協力会も、任意団体として活動以来二十七年、社団法人として認可をうけてから二十五年（四半世紀）の歳月を経ました。

長年に亘り本会を支えていただいた会員、ボランティアの方々、ならびに関係各位にあらためて深く感謝申し上げます。

本協力会の“生みの親”のひとつである田上義也さん（初代会長）に後事を託されたのは昭和六十一年のことでした。初仕事は十周年記念事業の準備、「名画を贈る運動」を広く推進することでした。

あれから十八年、振り返ってみると、まさに山あり谷ありで、いろいろなことが次から次と想い出され感慨一入のものがあります。回想はさておき、折角の機会なので、日頃私なりに考えていること、一端を要約してここに記し、会員各位のご理解をいただきました。

いと思います。

設立二十五周年を迎えて、

大切なことは、(一)歴史的な歩みと足もとの現状をよく確かめ、(二)変りゆく時代の流れを見きわめるとともに、(三)本来の目的つまり原点をしっかりと見据えて、(四)協力会としての事業活動、運営、組織、財政などすべての面で「総点検」

し必要に応じて改善もしくは改革を総合的かつ、有機的に図っていくこと、そのためには、理事、ボランティアを含め会員全体の意識の深化、向上、つまり本協力会の原点に立ちかえった「意識革新」が大事だと考えております。

これからの進め方については、運営会議で具体的に検討を重ねているところであり、時期をみてお知らせいたします。

新年早々いささか堅い話になりましたが、気持ちにおいては、私もボランティアの一員として皆様方と共に、肩の力をぬいて明るく楽しく、心豊かにやっていきたいと思っています。もともと「美術館」は特殊なところではありませ

ん。憩いの場であり、楽しむところなのです。誰でもが気軽に足を運んでいただいでそれぞれの気持ちで美術に親しみ、

楽しかったからまた来よう、家族、友人、知人とさそいあつて輪を広げ、繰りかえし訪ねてきていただけるようになりたいものです。会員の皆様方それぞれの持場なり、立場での普段の活動の中で、来館者の身になって、きめ細かな気配りで、ホスピタリティに勤めることを願っております。

いま、設立二十五周年を迎え、次なる節目としての三十周年にむけ気持ちを新たに、

再出発するにあたり、会員各位の深いご理解とボランティアの皆様方のご尽力ならびに関係当局のご支援をいただきながら、協力会らしい活動の一層の充実を図るために微力ながら尽くして参りたいと考えておりますのでよろしくお願いたします。

末筆ではありますが、新しい年を迎え会員並びにご家族の皆様方のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

社団法人北海道美術館協力会の歩み

※恒例的事業は省略

年月日	事項
昭和52年3月	北海道美術館協力会創立準備実行委員会発足
6月	北海道美術館協力会創立総会（札幌彫刻美術館開館）
7月	売店活動開始
8月	美術講座開始
昭和54年7月	「社団法人北海道美術館協力会」設立
11月	第一回海外研修旅行
12月	会報「第一号」発行
昭和55年1月	駐車場管理事業開始
昭和56年6月	解説ボランティア活動開始（札幌彫刻美術館開館）
昭和57年4月	創立五周年記念（会員個人三八四人、法人三五）
7月	*ボランティアに感謝状贈呈（北海道立旭川美術館開館）
11月	*ボランティア活動5年間のあゆみⅠ発行（一九七〇～一九八〇）
昭和58年1月	「子どもと親の美術館」協力開始（ボランティア）
7月	北海道立三好好太郎美術館「新館」へ移転
12月	第一回会員のついで
昭和61年9月	（北海道立函館美術館開館）
昭和62年1月	創立一〇周年記念事業（会員個人八〇八人、法人五四）
12月	*北海道に名画を贈る道民の会「発足募金運動開始」
12月	「ボランティア活動5年間のあゆみⅡ」発行（一九七〇～一九八七）
昭和63年6月	「北海道の名画を贈る道民の会」募金運動終了
9月	マリイ・ローランサン作品二点購入
10月	（油彩二号、「二人の娘」・水彩五号、「犬と三人の少女」）資料部活動開始
10月	北海道美術館協力会二〇周年記念誌（一九七〇～一九八八）の発行
平2年	売店収益金で渡会純价の版画購入、北海道立近代美術館に寄贈
平3年8月	ボランティア二〇周年のついでに、於「フジヤサントス」
平4年4月	（北海道立帯広美術館開館）創立一五周年記念事業（会員個人二七五人、法人九九）
平5年3月	「ボランティア活動5年間のあゆみⅢ」発行（一九八七～一九九二）
平6年4月	協力会事務局組織・職制規程改正
	*ボランティア七部制となる（事業部・広報部・売店部・解説部・資料部・研修部・特別活動部 合計一七五人）

法人設立25周年に寄せて

北海道教育委員会教育長 相馬 秋夫



このたび、北海道美術館協力が法人設立二十五周年を迎えられましたことを心よりお喜び申し上げます。

北海道美術館協力は、昭和五十四年八月に民間ボランティア団体から社団法人となり、様々な美術講演会・講座や鑑賞される皆様に対し作品を解説されるなど、道立近代美術館をはじめ、道内の公立美術館等に対する幅広い協力活動を展開してこられました。

この間の関係各位のご努力に対しまして、心から敬意を表するとともに、協力会の会員の皆様のお力添えにより、道立の近代美術館をはじめ、旭川美術館、函館美術館、帯広美術館、三岸好太郎美術館、釧路芸術館など公立の美術館等が道民に親しまれ、発展してまいりましたことに対しまして、改めて感謝申し上げます。

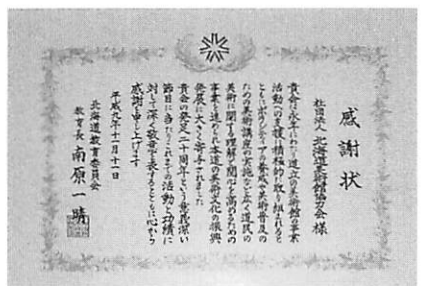
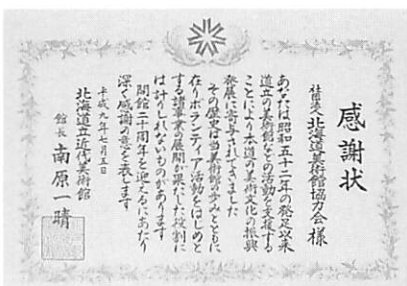
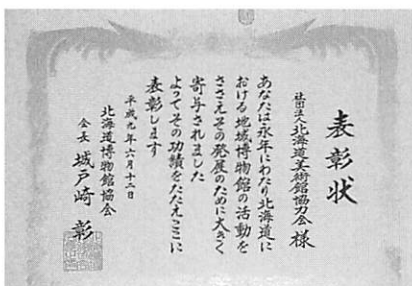
近年、人々の生活意識や価値観の多様化が進み、ゆとりや潤いといった心の豊かさや求められ、文化への関心や期待が一層高まってきておりま

す。

北海道教育委員会といたしましては、厳しい財政状況ではございますが、道立美術館等の各種事業などを通じ、多くの道民の方々がより身近に芸術文化に親しむことのできる環境づくりに努めてまいりたいと考えております。

各美術館等においては、限られた予算の中で創意工夫をし、各種事業を行っているところでございますが、より多くの道民の皆様が、身近な文化施設として気軽に利用される美術館にしていくためには、北海道美術館協力会のご支援、ご協力は欠くことのできないものであると考えております。北海道美術館協力会の会員の皆様には、今後も、本道美術文化の振興発展の牽引役としてご尽力くださるようお願い申し上げます。

終わりに、関係の皆様のご健勝とご活躍をお祈りし、お祝いの言葉といたします。



平成9年北海道美術館協力会創立20周年記念に北海道博物館協会、近代美術館、北海道教育委員会からそれぞれ感謝状が贈呈された。

平17年1月	平16年4月	平16年12月	平15年3月	平14年10月	平14年10月	平12年7月	平12年10月	平10年3月	平10年3月	11月	10月	7月	平9年6月	平8年4月	平7年12月
協力会法人設立二十五周年記念会報特集号発行	道立近代美術館一階売店を一階に移転	海外美術研修旅行休止（イラク戦争によるテロ対策のため）	海外美術研修旅行休止（新型コロナウイルス流行のため）	海外美術研修旅行の招待休止	協力会全会員証による同伴者利用制度の廃止	協力会ホームページ開設	「ボランティア活動5年間のあゆみ」発行（一九九七～二〇〇二）	「ボランティア活動5年間のあゆみ」発行（一九九七～一九九七）	旧拓館所有美術品を整理回収機構（RCC）より購入	（松島正幸）「新緑の札幌」一点、油彩三〇号、一九八一作 購入	金額九四五〇〇〇円	協力会ホームページ開設	創立二十周年記念事業推進委員会設置	愛称「アルテピア」決定	協力会「愛称」募集開始

変身願望

北海道立近代美術館館長

水上 武夫



北海道美術館協会の社団法人化二十五周年を心からお祝い申し上げます。改めて現在の活動、ふりを拝見しますと、継続は力という言葉に思い当ります。それは中断することなく日に日をついで、手をたずさえての地味な活動の積み

重ねであり、そのことを思う時、二十五周年の重みは一層増すのだと信じます。それは同時に私も近代美術館の継続は、皆さまの力に負うのだという実感を深くします。お祝いばかりでなく感謝も申し上げる次第です。

しかし、二十五周年を境にしたあたりからお互いむずかしい局面に入って来たというのも実感です。なおかつそのむずかしさの味が共に同じというのが悩みの種です。協力会も当館も財政的に先細りに直面しているということ

です。皆さまは、各会員の特典に改革のメスを入れるなど、新たな一歩を踏み出しましたし、遅ればせながら当館もショップを一階に一元化するなどの

措置を取りました。さらに、昨年度の「安田侃展」に続き今年度も「流政之展」の開催に当たっては、大応援団をつくっていただくなどの新しい形の展覧会像を模索いたしました。もとより私共の改革はほんの序の口であり、行き先も定かではありません。

したがって今日も明日も出来ることをどんどん積み重ねていくしかないのだと思います。それも常に利用者の立場にたつての改善でなければな

らないのは当然だと思います。しかし、二十五周年もたつと知らず知らずのうちに利用者よりも自分の組織を大切にしていたり、自己犠牲を避けなくなったたり、責任を自分以外のところに見つけようと努力したりしがちです。私自身がそうでした。

協力会発足のころ

元北海道立美術館館長

工藤 欣弥



近代美術館が開館する前、北海道立美術館（前二岸好太郎美術館）には「道立美術館友の会」という組織があった。美術館協力会設立のことを耳にした時、私は全国方々の美術館にあるこの「友の会」という組織と、今度設立され

ようとしている「協力会」と、どこが違うのか率直に疑問に思った。設立運動を中心になって進めておられた谷貴子さんは、この点を明瞭に説明してくれました。友の会はその美術館の愛好者の人たちの集まりで、

美術の鑑賞と会員の美術に関する教養を高めることを目的に、講座や美術鑑賞旅行などの事業を行う組織であり、協力会は北海道の美術館の活動に直接具体的に協力する組織である、と。

そして近代美術館開館とともに始まった協力会のボランティア活動、作品解説活動、売店活動などは、これまで道立美術館の館長として経験して来た「道立」なるがゆえに直接出来なかった、しかし美

術館として当然やらなければならぬことを、美術館に代わってやってくれる組織であることに、私は驚きに似た思いで目を見張った。特別展のときのオープンニングパーティーというのも、今はあまりやらなくなったが、しばらくの間必ずといってよいくらい開いていた。あれも「道立」なるがゆえに直接はできないことを、協力会でやってくださったっていたと理解している。



北海道立文書館
(元北海道立美術館)

二十五周年をお祝いして

元北海道立近代美術館第五代・第七代館長

澤 宣彦



社団法人北海道美術館協力が設立二十五周年を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げますとともに、道立近代美術館をはじめ、道内の公立美術館の運営のために展開してこられた幅広いご支援ご協力のご活動に對しまして衷心より敬意を表し感謝を申し上げます。

私が、道立近代美術館の館長を兼務したのは、昭和六十二年六月と昭和六十三年五月の二回にわたる通算二カ月という短い間でしたが、道立近代美術館の開館十周年記念の特別展や皇太子殿下（現天皇陛下）、美智子同妃殿下、紀宮殿下の行啓を仰ぐなど、思ひ出深い機会でした。特に皇太子殿下をご案内した際、「ここに並んでおられる方々は、当館の協力会員の方です」「この絵は、

本道の岩内町出身の木田金次郎画伯の作品です」「小樽は、ガラス工芸が盛んでございます」等々、申し上げたところ、殿下から「協力会会員の人数は何人ですか」「岩内町はどこにありますか」「小樽でガラス工芸が盛んなのは何故ですか」とご下問がありました。

「沈黙に耐えられずに喋るときほど、大きな後悔はない」というラ・ロシュフコーの箴言が、今も身にしみて思い出されます。

道立近代美術館が、国内外の美術・工芸品の収集・保存・展示はもとより、さまざまな美術講演会、解説をはじめ、実技講座や各種調査研究、出版活動などを通して、本道の芸術文化の拠点として、道民から親しまれ支持されておりますことは、同慶の至りです。ルノアールは、「絵は見る



色彩の響き

ものではなく、一緒に生きるものだ」と言いましたが、画家が、彫刻家が生きた時代背景と、その生きざまを思い、創作活動を衝き動かしたであろう希望や歓喜、痛憤や慟哭などの作者の情念に共鳴・共振し、ときに反発しながら、作品にみなぎる生命力を吸収して明日に向って賦活できることは大きな喜びです。

かつて経験したことの無い烈風を伴った台風十八号によって道立近代美術館を囲む折角の豊かな緑が損なわれ、いささか侘しくなっておりますが、昨年まで、前庭で、風が渡るにまかせてさまざまな表情を見せていた新宮晋先生の「色彩の響き」は、唐の慧能禅師

の「風動幡動」の公案に倣って、心を自在に憩いと安らぎの時間を与えてくれていた秀逸な作品で復活が待たれます。

全国で、一、〇〇〇館を超える美術館が開設されており、一方で、閉館を余儀なくされている館が絶ちませんが、全国の美術館ボランティアの先駆けとして、道民と美術館を、より深く広く結びつけながら、美術館を育て支える大きな力として優れた活動実績を挙げてこられた「北海道美術館協力会会員」の皆さんには、美術館活動に對して、今後一層のご支援ご協力を賜りますよう、ますますのご活躍とご発展をお祈り申し上げます。



北海道立三岸好太郎美術館



北海道立近代美術館

喜び



谷 貴子

「道民は長い間美術館建設の促進運動を続けてきたが、美術館の生命が、単に建物に止まらず、運営如何に懸ることの大切さを考え、純粹の民間組織である協力を発足させた。充実した美術館の活動を外部から支援、協力するものである。」

これは北海道美術館協会の設立に際し、小梁川重彦氏（理事。故人）が起草された趣意書の前文です。
道民の美術館への長い思いが運動となって形を成したの
は、一九六一年九月の北海道美術館建設期成会設立でした。
一九六七年に、作品の寄贈を受け、道立三岸好太郎美術館が開かれました。そして一九七七年七月二十日、待望の北海道立近代美術館が誕生した

のです。

「純粹の民間組織である」北海道美術館協会の発足は、一九七七年四月十七日の発起人会の後、一〇五名の会員を得て開かれた六月十七日の創立総会でした。その二年後、梅津財団よりの篤志寄付を受け、社団法人格を得るに至りました。爾来二十五年の歳月が過ぎ去ったのでしょうか。遠い昔を振り返りますと、ただただ眩めく思いです。

協会の記録は、「北海道美術館協会一〇周年記念誌一九七七一―一九八八・三二」、「美術館とともにーボランティア活動5年間のあゆみ」(一九七七一―一九八一)、同II(一九八一―一九八六)、同III(一九八七一―一九九二)に残されています。ボランティアの活躍、「名画を贈る運動」

が全道に展開された一大草の根募金活動等々、先例の無い道を拓いてきた記録でもあります。

私たちの共有する美術館、それを支援、協力する「純粹の民間組織である」私たちの協会。設立にあたり、小梁川氏は一語の無駄も、一語の疎漏もなく、見事にきっぱりとその理念を謳いあげました。数え盡せない人々がそれぞれに、様々な形で関わり、協力会と共に歩んできました。私と同じようにその方々が多くの喜びを得られたことを、又得られつつあることを信じて疑いません。

北海道美術館協会の更なる発展を祈念申し上げます。
(元美術館協会理事)



解説ボランティアの始まり



相馬 久子

美術館の絵の前に毎日入り込んでいられたら、どんなに幸せなことだろう。このような憧れを抱き、発足したばかりの道立美術館主催、第一回美術館ボランティア養成講座に入れて頂いた人たちの中から、解説ボランティアを希望する人たちが十人ほど残りしました。

養成を担当して下さるのは普及課、しかしスタートしたばかりの美術館のこと、当初はどちらを向いてもお忙しいうで、暫らくは私たちも手さぐりの日々でした。
なにもないと仲間が減ってゆきそうなので、仲間の中で自主学習を計画しました。その方の持つ知識ややれること、例えば日本画の顔料の扱いについてとか、また札幌での美

術評論活動をした人の話を調べて発表する方もありました。

また当時の倉田館長は、展示室に私共を連れて行って作品の前でお話ししてください。小さな群に「求美会」と名付けて励まして下さいました。

作品や作家の資料を探しに古書店に行くことも覚えまして。そういう期間を経て、やっと解説の訓練が始まりました。

笹野課長をはじめ学芸員の方々からは、館内での立居振舞、資料の扱い方や話す言葉のえらび方等、綿密な教育をして頂き、そして最初の日を迎えました。

その後二期生が加わり、「求美会」は北海道美術館協会ボランティア部の解説部となりました。

この二十五年の歩みの一つひとつを大切に、日本全体から見ても特長のあるこの協会のボランティア活動が、ますます成長されますことを心から願うものでございます。

(前美術館協会理事)

二十五周年に

思う



杉野目康子

会の創立当初からボランティア会員として活動に参加していたが、しばらくして夫の母のすすめに従い終身会員となった。父も母も北海道に美術館を建てることに並々ならぬ情熱をもち、建設運動にかかわっていた。母は私が終身会員になれば、自分たちの意思がしっかりと私に引き継がれると考えたにちがいないが、その後二人の遺志を継ぎ、ふさわしい貢献をしたかと考えると忸怩たるものがある。当時は、二十数年分の会費を前払いうることで責の一端を果たしたような気持ちでいたが、「終身」ということばのもつ重い意味をあらためて噛みしめている。

十年であったがボランティア活動を通して多くのことを学ばせてもらっている。当時日本では私達のめざすような美術館ボランティアは珍しく、欧米での例を手がかりに試行錯誤の毎日であった。とりあえずやってみる、うまくいかないときは、なぜそうなのかなで考える、そして新しいやり方に変えてみる—こういう取り組み方でやっていたと思う。我々は、この慌ただしさを自嘲気味に「朝礼喜改」と呼んだが、実際に即して考えることの大切さ、制度や組織は状況に依りて変えていくものなどということを学んだ。協会の基本理念である民主と自治のイロハを学んだといえれば大袈裟だろうか。

革をおこなないながら社会の多様や要請に対応してきた。多くの方々のたゆみない努力の積み重ねの結果と思う。公立図書館のなかには運営をNPOに任せるところもでてきたという。協力会にも更に大きな役割が求められるにちがいない。あらためて会員としての責任の重さを感じている。

(美術館協力会終身会員)

お

い

振り返ってみて

思うこと



関川 節子

「ボランティアとは、志願による全くの自発的な活動であり、何らの報償を求めぬ崇

高な奉仕活動です」と、教えて下さったのは、活動を始めて五年を経た「ボランティア活動5年間のあゆみ」の中の、元倉田館長の文言でした。美術館ボランティア活動を始めた創立メンバーの誰一人として、そこまで深くは考えていなかったと思います。スタートから五年間の売店ボランティア活動は、試行錯誤の連続で、やり作り学んだ事ばかりでした。全員が心をも一つにして精力をつぎ込み、次第に形も心も作られつつ、倉田館長の言葉が躰の中から自ずと感ずる様になってきたと思います。

スター配布もしました。元気がありました。

現道立近代美術館の水上館長が「ボランティア活動5年間のあゆみV」で、美術館は単に文化活動の拠点であるばかりでなく、十分に経済活動の拠点たり得ると思うとのべられています。開かれた活動時代と共に期待される売店活動が、そこにある。と着目し、先ず水上館長のお考えを勉強してはどうでしょうか。豊かな活動の目的意識を持つ為に。部員ひとり一人の毎日の積み重ねが力となるからです。法人設立二十五年の節目に、新しい時代に向って更なる前進を期待します。

また、今年売店を美術館正面玄関左右に一元化させて戴いた事の重大さと、その意味を思う時、これから美術館が望むもの、そして協力会が望むものとは何かを、原点に立つて心から考える時と思います。

(現美術館協力会理事)

美術館協力会の ボランティアになって

平成16年度入部

事業部

古畑 典子

夏休みを利用してのミニ・アトリエは、子供の五感を働かせ作品を完成させることで、楽しさ、達成感を味わえるよい機会と思いました。

「また、美術館に行こうよ。」と子供の口から聞くことができたら、「うれしい」の一言です。



「会員のつどい」受付

広報部

水野和加子

してはならない、しなければならぬ、組織に属せば必ず生じる制約の中、無償の善意を核に据えながら、喜びややりがい、そして地方に在ってどのような貢献が出来るのかを模索していくことが、今の私の課題です。



会員あて資料発送作業

売店部

小山 徳子

良い美術館では、「上質なひととき」が約束されています。

私達の活動が、そのお手伝いの一端を担えたら、どんなに素晴らしいでしょうか。新人の身としては、先輩方の意識の高さに感化されつつ、日々研鑽に努めるばかりです。



ミュージアムショップ

ボランティアを 続けて思うこと

長峯 慰子

売店の「売り子」としてボランティアの仲間になったのは、近代美術館オープンの前日だった。

ボランティアとして目覚めていくきっかけになったのは、常設展で見た林竹治郎の「朝の祈り」の感動を誰かに伝えたいという思いが強くなったこと、もう一つには、売店部門の中で誕生したオリジナル商品開発の先駆けともいえる製作活動に参加したこと。同じ目的意識を持つ仲間と活動する楽しさ、それにもまして、来館者に喜ばれ販売効果の手ごたえを感じた時、その喜びは大きかった。

その後、解説、広報、特別活動部と一つひとつの活動をクリアしていく中でボランティアとは何か、誰とどのように向き合ったらよいか、そのあるべき姿を自分自身に問いかけながら活動を続けてきた。たしかに、ボランティアが設立した



解説

解説部

西岡 裕子

協力会の二十五年の歴史、長くご活躍されている先輩の存在は、新人で無我夢中の私にとって大変心強いです。

二十五年先になっても社会に必要とされ続け、楽しく活動できるように、新しい事にも気後れせず挑戦したいと思っています。

資料部

竹本めぐみ

ボランティア一年生として六ヶ月余、同期九人とは情報交換しつつ、新聞切抜き、検索カード作成、スライド整理と、毎日勉強させていただいています。

友人に、「どんな事してるの？」と興味をもたれるので、協力会の活動を、身近なものとして伝えていきたいものです。



資料検索カード作成作業



美術講座

研修部

今本 良子

微力ながら歴史ある協力会に入れて戴いて、歓びと責任を感じています。

専門性の高い活動内容と熱心さに戸惑うことがあります。が、どのように向かっていけば良いのか多くの方達との交わりを通じて学んでいきたいと思えます。

特別活動部

安達みゆき

美術館協力会ボランティアの末席に加えて戴き、何より諸先輩の向上心と能力の高さに驚いています。

非力な私ですが、身近な所から活動の輪を広げていけたらと思っています。

今年は、節目でまた変革の年。会の今後の発展が楽しみです。



ジュニアアートクラブ

当時よりはるかに、専門性の高い活動が進められている。知識や技能を習得し、高いハードルをめざし人々の期待にこたえられることも活動の目的のひとつに違いないが、活動がより活発になるほど、熱意が優先し、人と人の向き合い方や関わり方など、とかく心のありようが希薄になり、ぎすぎすしたゆとりのない状態に陥ることもある。美術館は癒しの場、そこで活動する私たちは、優しさや思いやりの心を大切に、ゆとりのある活動を続けていきたいもの。そのためにもボランティアとして何が大切かを、みんなで学んでいきたいと思う。

今、私は地域に根ざした活動を目指し、美術を通して喜びを共有する仲間の輪を広げるために日々研鑽し活動を行っている。それは決して容易な事ではないが、地域の人達の満ち足りた笑顔を励みに、ボランティアだからこそできる地域に溶け込んだ活動をこれからも続けていきたいと思つ。(昭和五十二年からボランティア活動中)

二十五年の歩み

思い出の募金活動



理事 大萱生 明

マリー・ローランサンの作品「三人の娘」と「犬と三人の乙女」を観るたびに「北海

道に名画を贈る道民の会」の募金活動を思い出す。協力は、設立当初から美

術振興基金の造成という大きな目的があり、将来その基金をもとに美術館に絵を贈る等の協力事業をする考えもあつて、ボランティアの方々の間で「私たちの手で美術館に絵画を」という願いが長年温められてきた事実もある。

近代美術館開館十周年と協力は創立十周年を記念する協会の特別事業として、北海道に絵を贈る募金活動をする事になったのである。

街頭募金風景



チャリティバザール



この募金運動は、協力の関係者だけでなく、全道民約五百万人が一人百円ずつ出してくれたり五億円になる。五億円の名画を買って道民の財産にしようというものであった。

全道規模の募金運動を展開するため、中でも当時理事の建部直文氏、鈴木英二氏を中心に協会が呼びかけ人となり「北海道に名画を贈る道民の会」実行委員会が、昭和六十一年十二月に組織された。募金期間は昭和六十二年一月～十一月までとしたが、目標額に程遠かったことなどにより、半年間延長して昭和六十三年六月まで行われた。協会としても、テレホンカードやカレンダーの頒布、ピアノコンサート、ヴァイオリンとピアノコンサート、その他に道民の会として街頭募金三回、チャリティ・ゴルフ大会、バザール等のイベントによる収益金も

チャリティオークション



合わせて、募金額は九千七百六千円で、残念ながら五億円には、はるかにおよびないものであった。しかしこの募金運動は、協会が総力を挙げて取り組んだ事業で、募金額の多寡はともかくとして、多数の道民から寄せられた善意の成果で、寄贈された二点の作品は、道民にとっては名画であり、宝であると思う。

(元美術館協力会事務局長・専務理事)

チャリティ・ゴルフ大会



協力会の目指すもの

— 木路毛五郎さんの意志を継いで —



理事 和田 壬三

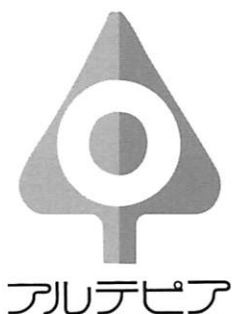
木路毛五郎さんから誘われ、北海道民の美術振興のために道立近代美術館の協力会を作ろう、会員を一人集めれば、毎年少くとも五千万円、二年貯めれば一億円の絵画を美術館に寄贈出来ると熱い思いを語り合い、それが必ず実現できると信じて、二十数年経ちました。

近年は、絵を寄贈するどころか、協力会の存立も危ぶまれる状況の中で足踏みしていますが、私は、正しいことはいつか、それが、百年後であっても必ず実現すると信じています。

どんなに理想を掲げても、会の存立を離れては、実現できないことは、承知の上で、協力会として目指さなければ

ならない、美術を愛好し、そしてみんなの力をあわせて、優れた絵を集めようという志を持った会員を拡大することに力を注いできました。優れた絵が、身近にたくさん存在すれば、道民の美術志向も自然に高まり、会員も自然に増えるという理想的な展開になることを夢見ています。

木路先生が亡くなり一年が過ぎました。いつかは、私も同じ運命が訪れるものとは思いますが、たとえ、墓場に行くときに運動の目的が実現していなくてもそれは、はるかな道程の一部と思えば後悔はしません。目的に向かって少しでも努力できたことに満足します。



協力会の20周年に当たって、みんなに親んでもらえるように、との願いを込めて広く一般から「愛称」を募集した。372点の中から、横浜市の為我井敏雄氏の「アルテピア」が採用された。イタリア語の芸術・美術を意味する「アルテ」と、架け橋・友人の「ピア」を造語したもの。それに伴いロゴも作られた。

シンボルマークは、熊谷直勝氏のデザインによるもので、アート（芸術）の頭文字Aに光が差しこんでるイメージだが、全体としては、樹のイメージになっている。

みどり色は森を、空色は空をあらわす。

会員相互の親睦交流を目的として、毎年協力会通常総会終了後に「会員のつどい」を開催

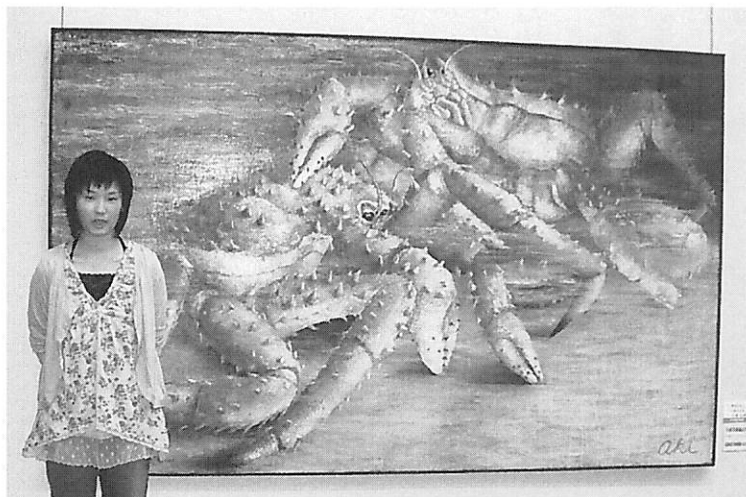


シャンソンとワインの夕べ

(平成16年5月30日近代美術館ロビーで約140名が参加し交流が図られた。)

若い芸術家の誕生!

平成16年10月3日第46回学生美術全道展が開催され、札幌市東区札幌大谷高校2年生、近藤亜樹さん(17才)の作品「愛するものと」が最高賞(協力会会長賞)に輝く。



受賞作品「愛するものと」と作者



学生美術全道展の表彰式において、美術館協力会藤井専務理事から、協力会会長賞を贈呈した

近代美術館2階売店(ミュージアムショップ)が1階正面玄関西側に移転 来館者へのサービス向上と売上増に期待!



(東側)



(西側)

ホームページアドレス <http://www.artepia.or.jp>
Eメール artepia@artepia.or.jp

明けておめでとうござ
います。

会員の皆様方には心から新春のお慶びを申し上げます。二十七年前の昭和五十二年に任意団体として北海道美術館協力会が、美術文化の一端を担うべく多くの方々を熱い思いで創立され、二年後の五十四年には公益法人格としての社団法人を設立、以来多くの会員・ボランティアの方々に支えられ二十五周年を迎えました。

四半世紀に及ぶ協会の活動を振り返るとともに、新たな出発にむけて多くの方々からご示唆をいただきたく特集号を発行しました。

時代の折々に係った方々からご寄稿をいただき、改めて関係者のご苦労がしのばれました。

これを機に協会の益々の発展と本道の美術振興に努力したいと思っておりますのでご支援ご協力をお願いいたします。

(事務局K)

編集後記